

現代っ子の育つ過程

—発達障害は生まれながらではない¹⁾—

川崎医科大学小児科 片岡直樹

1. 現代っ子の育つ過程

子どもは、大人の常識的な世界とは全く違う世界を持っています。この子どもの世界での体験を踏まえ、子どもは大人になっていきます。言い換えると、大人になるということは、この世の常識とは異なった子どもの世界（ファンタジー）と距離をとりながら、生きていくことかもしれません。子どもの特徴はファンタジー（空想）の世界を持つことなのです。満月の中にうさぎの餅つきを見たり、サンタクロースを信じたり、子どもたちだけの体験ごっこやおとぎ話やイソップ物語の世界です。サンタクロースをいつまで信じていたかが、その幼少期の幸福度を示すバロメーターになるといわれています。それは、「サンタさんがプレゼントを自分に持ってきてくれたんだ」という子どもが信じている物語を含めて、家族ら周りの人たちが子どもを大切に思っていることの証明になるからでしょう。

しかし、その「子どもの世界」自体を否定するような科学的な教育を受けたり、早いうちから「子どもの世界」との接触を断ち切られる子どもも増えています。また、その世界に浸るチャンスを逃がしてしまうこともあります。「子どもの世界」とちゃんと距離をとれるようになるためには、まず、しっかりと、どっぴりとその世界に浸ることが大切です。それが欠けると、子どもとして生きられなかったことになってしまいます。言われたことがちゃんとできても、沢山の知識をいっぱい記憶していても、どんな遊びをしたら楽しいのか、わくわくと心が動か

されるのかわからない子になるかもしれません。

さらに、慄然とすることは、乳児早期から自分以外の人間と意思表示が伝わらない赤ちゃんが増えていることです。

2. 子どもの脳の発達へのテレビ・ビデオの影響

—テレビによる後天的な言葉遅れの事例を中心に—

今、保育園で笑わない赤ちゃんが増えています。多くはすでに生後3～6ヵ月で、表情が乏しく、微笑みが消えています。3～5家庭に1家庭では朝から晩までテレビがつけばなしなのです。そのうち、5～10人に1人の赤ちゃんがコミュニケーション不良を来しています（出生30～50人に1人にあたります）。テレビがついていても、その5倍ぐらいの時間を抱っこしてあやしたり、外へ連れ出したりと応答的環境が十分確保できれば問題は発生しません。養育者は、彼らが1～3歳になると、他者とのコミュニケーションがとれないことに気付いたり、乳幼児健診時に発達の遅れを指摘されたりし、専門機関へ紹介されると、コミュニケーション障害と診断されます。その診断、治療に戸惑う養育者が、インターネット、新聞、雑誌などで著者の本^{2),3)}に出会うと、直ちにテレビ・ビデオを消して、川崎医科大学小児科へ連絡してきます。全国各地からやってくる2～3歳のコミュニケーション障害児は2,000名を超えています。最近4年間は、来院時、患児の生い立ちの生活

① 応答的環境がないと、自己認識の発達不全が起こる。一心の理論が育たない

生直後は強く泣くか長く泣くかしか自分の意思表示ができない。1ヵ月もすると泣き方を変える。空腹を感じて泣くという意味を伴った行為に、母親がおっぱいを含ませながらあやす。満足して泣き止む。ところが、機械的に3時間ごとにミルクを与えたり、泣いてもあやさなかったりすると赤ちゃんは泣くことをやめる。意思が通じないと「自分の確認」ができず、他人の心を読めなくなる。

② テレビの直接的影響—空間認知が育たない

テレビは二次元の世界であるので、片眼でも見える。目が2つ、耳が2つの機能が育たない。立体的なもの、移動するもの、相対的な動的関係が理解できない。動くものやボール遊びが苦手。遠近感がわからない。指差しができない。きき耳が育たない。

③ 実体験が不足すると、シンボル化能力が育たない—デジタル認識

五感を使った無意識の体験が具体的概念をつくる。赤ちゃんは実体験を重ねることで、ワンワンとニャンニャンを1～2歳で区別する。カードや絵本で教えられる行為はデジタル認識になる。カードで覚えるワンワンとニャンニャンは「知識」として記憶するだけで、現場で本物の犬と猫を区別できない。無意識の理解が育っていない2～3歳でひらがな、数字、アルファベットなどを覚えたりパズル遊びもデジタル認識になる。デジタル育児よりアナログ育児が大切である。アナログ育児は、考える脳を育て、発想力や創造性の源になる。

《考察》

サーゲイ・サンガー氏（「乳児はなんでも知っている」著）⁶⁾は、20年前赤ちゃんの行動を、ビデオ記録と心臓鼓動音の測定によって分

析し、赤ちゃんの一生は生後12ヵ月の育て方で決まると述べています。テレビ、ラジオ、ビデオなど“音”を発するものが親子の絆を阻害しているといいます。また、脳科学者の久保田競氏は、平成19年9月、著書「赤ちゃんの脳を育む本」⁸⁾の中で、見る、聞く、触れる、味わう、臭うといった感覚野や運動野の脳内回路は乳児期急速に発達し、人間性の基本的能力の大部分は1歳ぐらいに出来上がると記述し、寝かせっぱなしにしたり、テレビ、ビデオを何時間も見せておくと、喋れない子になることを警告しています。

著者は、30年前、乳幼児に対するテレビ環境の悪影響に気付き、臨床研究を行っています。最近4年間は、出生後より家庭ビデオに録画された映像と、コミュニケーション障害の診断後回復する過程の映像を集積し、発症原因とその対応を明らかにしています⁷⁾。小児のコミュニケーション障害は決して生まれながらの患児自身の問題ではなく、後天性で予防が可能な、国家をおびやかす重大な出来事です。重いものは100人に1人、軽いものはその数倍発生しています⁹⁾。

平成19年10月 American Academy of Pediatrics は、出生後2年間に全ての出生児の自閉症スペクトラム障害スクリーニング検査（M-CHAT）を推奨しているとロイター通信情報は伝えています¹⁰⁾。新しいガイドラインとして、笑わない、目を合わせない、片言を言わない、身振りが無い、呼んでも振り向かないなどの微妙な徴候を観察するよう小児科医に求め、早期介入、早期治療が大切なことを謳っています。後天性かつメディアなど“音”“映像”環境には一言も触れてなかったのが誠に残念です。発症要因が不明なまま、多くのコミュニケーション不良を見つけて、何を管理しようというのでしょうか。現場では混乱するだけです。

テレビによる後天的な言葉遅れの治療について述べます⁷⁾。テレビ、ビデオ、CD、BGM、電子おもちゃなどを除くだけでは決して良くなりません。赤ちゃんの意思表示、意欲、活動性、

愛着、五感、運動能力などが未発達のままであることにまず気付くことが重要です。基本的には育て直しをすることです。Bowlby J. の「愛着」が育つ過程を再現するのです¹⁾。対人関係が育っていない赤ちゃんは「イナイイナイバー」から始めます。ちょうど生後6ヵ月の頃です。

1歳で見つかれば、生後6ヵ月に戻るのは簡単ですが、3歳で見つかる大変苦労します。言葉が表現できない上に、自己主張だけは一人前だからです。

乳幼児に対する行動療法 (TEACCH など)

は極めて危険であると言わざるを得ません。愛着が育つことと、子どもに指示して教え込むことは相反することです。赤ちゃんが他者と心を通わせる人生の始まりの時期に、大人がやるべきことは赤ちゃんの言動にオウム返して応えることです。模倣するのが大切な時、単なる“記憶”の蓄積であるデジタル的育児では、赤ちゃんは心を通わせることを諦めます。

今、賢いコミュニケーション障害児が増加していることを大人は真摯に受け止めなければなりません。

《文献》

- 1) 片岡直樹、田澤雄作：公開講座「メディアと育児環境—子どもの身体と心が危ない！」未熟児新生児誌 19：110-113, 2007
- 2) 片岡直樹：テレビ・ビデオが子どもの心を破壊している！東京，メタモル出版，2001
- 3) 片岡直樹：しゃべらない子どもたち笑わない子どもたち遊べない子どもたち。東京，メタモル出版，2003
- 4) 片岡直樹：新しいタイプの言葉遅れの子どもたち。日児誌 106：1535-1539, 2002
- 5) 無量真見：自閉症の意識構造—デジタル文化が無意識の成長を阻害する。東京，現代書館，2005, pp 60-110
- 6) サーゲイ・サンガー：乳児はなんでも知っている。東京，祥伝社，1987, pp 63-91
- 7) 片岡直樹：子どもの脳の発達へのテレビ・ビデオの影響。Brain Medical 18：272-278, 2006
- 8) 久保田競：赤ちゃんの脳を育む本。東京，主婦の友社，2007
- 9) 片岡直樹：テレビ・ビデオの長時間視聴やテレビゲームと軽度発達障害とは関係がありますか？小児内科 39：213-214, 2007
- 10) Myers SM, Johnson CP：Management of Children With Autism Spectrum Disorders. Pediatrics 120：1162-1182, 2007
- 11) Bowlby J：母と子のアタッチメント—心の安全基地。東京，医歯薬出版，1993

